９生きたしるし（中野孝次）

　それにしても、この十年ばかりのうちに、日本人はなんと手紙を書かなくなってしまったことか。用事は電話ですます。それはそれで結構だが、手紙を書かなくなったという現象には①別の理由がありそうだ。手紙を書くとき、人はひとりである。相手を頭や心に思い浮かべつつその人に向かって書く。この孤独の中で人と（あるいは自分と）会話をかわすという心の習慣が失われてしまったのかもしれぬ。（中略）

　私はやはり、だれもが自分の手で手紙を書く習慣をもういちど取りもどしてもらいたい。私はその昔、便箋の上に涙がこぼれてんだらしい痕のある手紙をもらったこともあるが、手紙にはそういうことを含めて書く人の全部が出るのである。そんな手紙は、人が生きた最も貴重なしるしだ。人生の［　Ⅰ　］だ。うまくある必要なぞ少しもない。私の母は小学校しか出なかった人で、手紙なぞめったに書かなかったが、それだけに母から鉛筆をなめながら書いたとおぼしい誤字、あて字だらけの手紙が来ると、見ただけで胸が詰まった。その母も亡くなったいま、私にはそれは最も貴重な母の［　Ⅱ　］である。

問１　―線部①について、「別の理由」が書かれた一文を文中から抜き出し、最初の五字を答えよ。

〔　　 　　　　〕

問２　［　］Ⅰに入る漢字一字を「中略」部分以降から抜き出して答えよ。

〔　　　　〕

問３　［　］Ⅱに入ることばとして、最も適当なものを次から選び、記号を○で囲め。

ア　贈り物　　イ　形見　　ウ　遺産　　エ　土産

問４　筆者が最も強く述べようとしていることが書かれている一文を文中から抜き出し、最初の五字を答えよ。

〔　　 　　　　〕

【解答】

問１　この孤独の

問２　痕

問３　イ

問４　私はやはり